

# 令和4年度 全国学力・学習状況調査 箱根町立小・中学校の調査結果について

令和4年4月19日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果を次のとおりまとめました。

## 1 調査の目的（文部科学省より）

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

## 2 調査の概要

箱根町では、4校83人の児童生徒が参加  
(内訳：町立小学校3校6年生38人 町立中学校1校3年生45人)

## 3 調査内容

### (1) 教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※平成30年度までは、知識を問うA問題と、知識の活用力を試すB問題に分けて出題していたが、新学習指導要領で示されている資質・能力の三つの柱、特に『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』が一体的に育成されるという理念を踏まえ、令和元年度から①と②を一体的に問うこととする。

### (2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 (例) 国語への興味・関心、授業内容の理解度、読書時間、家庭学習の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

## 4 調査時間

〈小学校〉

1時限目	2時限目	3時限目	
国語(45分)	算数(45分)	理科(45分)	児童質問紙(20～40分程度)

〈中学校〉

1時限目	2時限目	3時限目	
国語(50分)	数学(50分)	理科(50分)	生徒質問紙(20～45分程度)

## 5 結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の分析内容について

### ◆小学校【国語】

「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、「言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることを捉えること」や「文の中で漢字を正しく書くこと」に課題が見られた。日常的な話合いや文の中で適切な言葉を使うことを通して、言葉の働きや漢字の有効性を実感できるようにしていくことが大切である。

「話すこと・聞くこと」では、「互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、自分の考えをまとめること」に課題があった。題意を正確に捉えられなかったのか、題意を捉えたものの答えが見つからず記述しなかったのかを見極めて今後の指導に生かす必要がある。

「書くこと」では、条件に基づいて書くことができるようになってきたが、今後は、目的や意図に応じた文章全体の構成や展開を考えたり、書き表し方に着目して文や文章を推敲したりなど、自分の文章表現に生かす力を付けさせたい。

「読むこと」では、描写を基に内容を捉えることや「どのように描かれているか」という表現面にも着目して読む力を付けていく必要がある。

### ◆小学校【算数】

前年度調査の結果から「数と計算」に課題が見られていたが、本年度はやや解消され、基本的な整数の乗法計算の正答率は全国平均を上回った。しかし、最小公倍数や概数などの用語の意味の理解や、計算の求め方と答えを記述式で表現する問題には課題が見られた。

割合の計算では、百分率で表された割合と基準量から比較量を求める方法や、数量が変わっても割合は変わらないことを理解していない児童が多かった。

図形に関する問題では、四角形の性質や特徴を理解できているものの、三角形の角度に関するプログラムの作成については課題が残った。与えられたデータから目的に応じてその特徴を読み取り、考察できる児童が多くいたが、数量の関係から式を立てて加法乗法の入り混じった計算を解く問題を難しいと感じている児童も見られた。

全体的に全国平均正答率と同等の学校が増え、少しずつではあるが進歩があると感じられる。今後に向けては、用語の意味を理解した上で最後まで文章を読み取り、問題解決に向けて粘り強く取り組む姿勢が重要であると考えられる。

### ◆小学校【理科】

「生命」を柱とする領域に関する正答率は比較的高く、中でも「昆虫の体のつくり」の問題では、「頭・胸・腹」といった昆虫の体のつくりをどの角度から捉えたらより鮮明となるか、正しく判別できている児童が多かった。また、昆虫の育ち方や育つ順番についても理解度が高く、改めて児童の実体験を通した学習活動が有効であることが明らかとなった。

一方、問題に対する予想と結果に基づいたまとめ方を修正したり、問題を正しく理解しながら結果を見通したりすることなどに課題が見られた。

日々の授業においても実験や観察を通して結果を導き出す際には、必ず予想と照らし合わせながら結果を捉えさせたり、問題を解決させるために必要な記録の内容について判断させたりする経験の積み重ねを重視し、指導していく必要がある。

#### ◆中学校【国語】

前年度調査に引き続き、「読むこと」では、文学的文章の内容理解が十分でないことが課題である。今回は「場面の展開や登場人物の変化などについて、描写を基に捉えること」や「場面と場面、場面と描写などを結び付けて、内容を解釈すること」に課題が見られた。場面や描写から直接分かることを把握するとともに、場面や描写に新たな意味付けを行えるよう、文学的文章を深く読み味わえる力を付けていく必要がある。

「書くこと」では、適切な情報を抜き出して書く問題の正答率が低く、解答の半数以上が、引用の仕方への理解が不十分なものであった。「話すこと・聞くこと」では、「自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話す」問題の正答率が低く、正答の3つの条件のうち、2つ以上の条件を満たして解答しているものが少なく、無解答率も高かった。

今後、国語科に限らず各教科等において、根拠を明確にしながら自分の考えが伝わる文章になるよう工夫していくことや、自分の考えが相手に分かりやすく伝わるように表現を工夫することを大切に指導していく必要がある。

#### ◆中学校【数学】

前年度調査の課題は「数学用語を正しく理解し活用する」「筋道を立てて考え、説明したり証明したりする」「問題を把握し考察し的確に処理する」の3点であった。今年度も課題に大きな変化は見られず、正答率は全体的に全国平均よりも低い結果となった。

「数と式」の領域では、素因数分解の用語の意味が理解できず、無解答率も高い結果となった。また、連立方程式を正しく解くことや目的に応じて式を変形すること、結論が成り立つための前提を考えて事項が成り立つ理由を説明することにも課題が見られた。

「関数」や「データの活用」の領域では、変化の割合の意味や与えられた表やグラフ、ヒストグラム、箱ひげ図から必要な情報を適切に読み取り、データの傾向を捉え、判断の理由を説明することに難しさを感じている生徒が多くいた。

全体を通して基本計算を含め思考力・判断力・表現力、数学的な見方や考察する力の差が個々に広がってきていると思われるため、基礎基本の問題から取り組む必要があると考える。

#### ◆中学校【理科】

小学校同様、中学校においても生き物（ダイオウグソクムシとダンゴムシ）の体のつくりと働きに関連した設問（記述式）は、一番正答率が高かった。やはり、生活に根ざした学習内容は、生徒にとっても興味・関心が高いのではないかと推察する。

全体的な正答率は、全国よりも低い結果となったが、特に大きな課題は「何について調べているのか」など、それぞれの実験・観察の目的に対する理解が十分ではないため、結果を分析しながら課題に正対して考察したり、探究過程において見通しをもちながら調査方法を考えたりすることに苦手意識が見られた点である。また、磁気ばねの測定値の増やし方について問われた記述式問題や水素の燃焼の化学式に関する問題では、正答率が低かったことも特徴的であった。

総体的に目に見える現象には対応できるものの、抽象的概念になると事象の把握に困難さを抱える生徒が多く見られる。化学変化に関する正しい知識が身に付けられるよう基礎・基本の定着を図ると共に、目的に応じた実験方法や追究の仕方について考えさせる継続的指導が求められる。

(2) 児童生徒に対する質問紙調査結果の分析内容について

【小学生の質問回答より】

- 「自分には、よいところがある」と回答した児童が約 90%おり、「先生は、よいところを認めてくれる」、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」の項目とともに肯定的な回答が全国平均を大きく上回った。学校的全職員で児童をほめる・認める教育を推進してきたことが、児童の自己肯定感の高まりとして表れてきている。
- 90%以上の児童が「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりしている」と回答した。教科等の学習や学級活動の中で対話的な学びを積極的に取り入れてきた成果であると考ええる。
- 「家で学校からの課題で分からないことがあったとき、どのようにするか（複数選択）」について、「自分で調べる」と回答した児童が最も多く、家庭学習につながるよい傾向が見られた。一方、「学校の授業時間以外における1日当たりの学習時間」について、「1時間以上」と回答した児童の割合は、全国平均をやや下回った。「朝食の欠食」や「不規則な就寝時刻」などにも課題が見られるため、基本的な生活習慣を整えたいうえで、学習習慣づくりに向けて取り組む必要がある。
- 「普段(月～金)、1日当たりのテレビゲーム(携帯式のゲームやスマートフォンを使ったゲームも含む)をする時間」について、「2時間以上」と回答した児童の割合は76%であり、全国平均を大きく上回った。また、「携帯電話やスマートフォンでのSNSや動画視聴する時間」についても、「2時間以上」と回答した児童の割合は55%であり、全国平均を大きく上回った。テレビゲームや携帯電話等を扱う上でのルールやマナー、一日の有意義な過ごし方等について学校と家庭で連携しながら考えていく必要がある。

【中学生の質問回答より】

- 「人が困っているときは、進んで助けている」、「人の役に立ちたい」、「友達と協力するのは楽しい」と回答した生徒は90%以上おり、全国平均を上回った。また、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」と回答した生徒の割合も、全国平均を上回った。箱根ハートフルプログラムの取組や地域へのボランティア活動・奉仕活動によって生徒の自己有用感が育まれ、意欲的な態度につながっていったと考える。
- 「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表した」と回答した生徒が、全国平均を大きく上回った。授業や行事等で生徒が発表する機会を適切に設けたことや、日頃の授業で対話的な学びを積極的に取り入れたことの成果が表れてきている。
- 「家で自分で計画を立てて勉強している」と回答した生徒が全国平均を上回った。一方、「学校の授業時間以外における1日当たりの学習時間」について、「1時間以上」と回答した生徒の割合は、全国平均を下回った。家庭で学習計画を立てる際の目標設定の仕方や自らの学習内容を見直し、次の学習につなげていくことができるような自己調整力を身に付けていくことができるよう取り組む必要がある。
- 「普段(月～金)、1日当たりの携帯電話やスマートフォンでのSNSや動画視聴する時間」について、「2時間以上」と回答した生徒の割合は64%であり、全国平均を大きく上回った。また、「携帯電話やコンピューターの使い方」について、「家の人と約束がない」と回答した生徒の割合は25%であり、全国平均を上回っている。スクリーンタイムの増加が、日常生活や学習に影響を与えることが懸念されるため、携帯電話等を扱う上でのルールやマナー、一日の有意義な過ごし方等について学校と家庭で連携しながら考えていく必要がある。